

## 交流の姿をめぐって

姜 錫祐

次の「これからの日韓関係に思うこと」というエッセイは、『国際ネットワークとよななニュースレター第6号』（1995年6月）に掲載された内容をそのまま転載したものです。大阪大学大学院博士課程の学生として社会言語学を学んでいた当時、考えていたことがまとめられています。

この文章を書いたからもう5年が経ちました。その間、韓国では1997年の暮れに行われた大統領選挙により政権が代わりました。それまでの政権では過去の日本との歴史問題などから日本文化の流入を政策的に抑制してきたのですが、新政権ではそれを段階的に受容するといった政策を取りはじめたのです。特記すべきことは、こうした韓国国内での社会変化は韓国人の対日観に少なからぬ影響を与えているといった点です。

21世紀の今日ではアムロナミエの歌が何気無く韓国の街に流れるような時代になりました。帰国して3年目、大学で日本語を教えている私はこれからの自分の役割について考えているこの頃です。韓国の大学生、そして日本の大学生が、互いの文化や考え方について語り合い理解を深めるといった交流の場(機会)をもうけることなどについてです。

(2001年2月)

### 「これからの日韓関係に思うこと」

#### 私にとっての日本

私が日本語の勉強をし始めたのは大学に入ってからです。もう14年前の話になりますが、当時の韓国は民主化運動が頂点に達し、同時に反日感情が高まっていた時期であったと覚えています。大学に入って最初の日本語授業のことでした。「皆さんはなぜ日本語学科を志望したのですか」という先生の質問に対して、大半の学生が「克日のためにまず日本語を勉強したい」と答えたことが今でも強く印象に残っています。言うまでもなく私自身もそう答えた中の1人でした。しかし、おもしろかったのは授業が終わってから、その授業をとっていた仲間同士のおしゃべりの途中で1人が「君たち！ 本当に克日のため日本語学科に入ったの?」と、にこにこしながら皆に声をかけると、「いや、別に、他には言うことがあまりなかったから」と返事する者や一方では「それが教科書どおりの正解だよ」とあいづちを打つ者もいたことです。実にアイロニカルな話ですが、今になって考えると、ここには日本人のよく口にする建前と本音が、韓国人にもよく現れているのではないかと思います。また、その背景に存在する

韓国教育の一断面が微かにみえるかもしれません。

日本語を勉強し始めてから、振り返ってみると笑えないハプニングも多くありました。

最初、日本語学科に合格したとき高校の同級生から嘲笑を買ったこともあります。電車の中で日本語の本を読んでいただけで、見知らぬ年寄りにきついことを言われたこともあります。しかし、良いこともあって、80年代の後半からは他の専攻者より就職活動がうまくいったため、周りの人からうらやましがられたこともありました。

幼い時は親から、小学校には行ってからは先生から、また周りの人々から何度も繰り返し聞かされた話は“日本は悪い”ということでした。

これらのような状況で、私の来日前の日本という国と日本人に対する感情は、何とも一言では言えない、実に複雑で微妙なものだったともいえます。

来日後、私が韓国で抱いていた日本と日本人に対するイメージや生半可な固定観念は大きく変わりました。最初は終始警戒の目で自分を守ろうとしたことがあります。そして、いつも笑顔で親切にしてくれる日本人と接しながら、心の中は大変な混乱が起こったりもしました。しかし、これは永くは続きませんでした。日本の友だちができ、その友だちと付き合っていて話しているうちに心の安らぎが感じられるようになったのです。

ところが、日本にきて4年以上経ったいまも、日本人に対してどうしても腑に落ちないところがあります。大部分が親切に付き合ってくれても、別れるときには、未練を断ち切るように立ち去るのを見るたび、これが文化の違いなのかなあー、と理解しようと思いつつも、何だか寂しい気持ちを隠せない自分を発見するのです。私自身の日本での研究テーマは広く言えば、異文化間のコミュニケーション研究といえます。そのために、外国人と日本人とのふれあいのなかで生じる問題点などをいろいろな角度から分析を行ったりし、他の専攻者に比べると日本人のコミュニケーション行動について少しは知っていると思っていました。にもかかわらず、そういうことで寂しい気持ちがするのは、ある文化のなかで生まれ育った人間が他の文化の人と接触したときに生ずる、ごく自然な人間の本能的感情の現れなのではないかと自分を慰めています。

## 異文化への理解

人間は生まれてすぐ一つの社会、一つの文化に属します。その中で人間は社会の一構成員になり、成長していくにつれて社会の中で守るべき規範、習慣等を身につけながら、社会的活動を行うようになります。

最近、異文化間のコミュニケーション研究が盛んになっていく傾向がありますが、

この研究は、国際社会のなかで、互いにどのように行動するかという問題を提起し、誤解のないコミュニケーションを行うのに重要な指標を示すことができると考えます。コミュニケーションにおける誤解の問題はほとんど避けられないことであって、同一言語を用いる一つの社会、文化に属している人間どうしでさえ起こっているものです。したがって、異なる言語構造ないし、異なる思考様式を持つ集団相互間ではより深刻な問題が起こるのは当然のことであると思われる。

私が異文化間のコミュニケーション研究に関心を持ち、特に日本と韓国におけるコミュニケーション(言語行動)の比較対照研究に進みたいと思うのは、長い歴史を持っている両国の関係改善に少しでも力になりたいからです。

一番近い国ながら一番遠い国ともいわれている日本と韓国。今なお「嫌韓・反日」という言葉で示され、隣どうしの国でありながら、なぜかしこりの取れない日本と韓国。過去へのこだわりが気持ちの中にまったく相反する結果を招いているのが日韓関係なのではないでしょうか。

それではこのように両国の間をさえぎっているものはたして何なのでしょう。その主なものとして、まず、政治的問題また経済摩擦などが挙げられます。その次に挙げられることは習慣や言語的(非言語的なものを含む)表現の違いから生じる誤解の問題です。この中で前者の場合は過去の歴史的問題が複雑に絡み合い、特に最近の韓国では戦後の補償問題ならびに日本の歴史教科書での韓国に対する記述などに強い関心を表しています。なお、日本や日本人と直接接触する機会のない一般の人々にとってはいま例に挙げたようなことを主にマスコミなどを通して接することになり、そこから日本・日本人に対するイメージが生み出されているものだと思います。こういった日本および日本人に対するイメージは全般に好意的なものではないといえます。したがって、最初日本人と出会うとき、韓国人は基本的にはマイナスイメージから付き合いが始まるといってよいでしょう。

その次、後者の場合は主に付き合いが始まってから生じやすい誤解の問題です。互いの付き合いが長くなるほど次第にマイナスイメージからプラスのほうへ変わっていくだろうと思われませんが、中には相手のいうこと(言語的表現)や行為を不愉快と感じることがあると思います。そこでせっかく築き上げた関係が無になることがあるかもしれません。

日本人と韓国人は顔の色も形も同じで、言葉に関しても語順がほとんど同じであること、あるいは文化的背景もほとんど一致しているからといって、単純に思考判断の基準も似ていると考えるのは大間違いでしょう。しかしながら、共通点が他の文化圏の人々よりも多いと思われるからこそ、かえって誤解が生じやすいのかもしれません。特に個々人の接触にあっては互いの習慣や言語的表現の違いがあることに留意するこ

とが何より大事なのではないかと思います。

### 日・韓の友好親善のために

私が「国際ネットワークとよなか」の紹介で豊中市のある小学校と中学校を訪ねたのは昨年暮のことでした。小学校には年間行事の一つであるスクールフェスティバルに、中学校は『朝鮮の文化に親しむ会』に、それぞれお招きいただいたのです。共に「韓国の文化を紹介して下さい」ということでしたが、依頼を受けてからそれぞれの学校に足を運ぶまで私は「韓国についてちっとも知らない日本の子どもたちに何を言おうとも何も役立たない。」とっていました。ところが、いざそれぞれの学校で目にした光景に私は驚くどころか感激のあまり胸が熱くなるくらいでした。日本の子どもたちが韓国伝統の衣裳を着て農楽を披露したり、チマチョゴリ姿でカヤグン(日本の琴と類似)を弾きながらアリランの歌を合唱する先生たち、一瞬私は在日韓国・朝鮮系学校に来ているのでは、と錯覚に陥るほどでした。

何しろ普通の日本の小・中学校で、しかも教育課程の一つとして韓国の文化を子どもたちにこれくらい真剣に教えている事実は、私にとっては全く考えられなかった出来事でした。というのは、私の常識から言わせると、現実的に韓国でこういう教育が学校で行われることはほぼ期待できないからです。

日本人と韓国人における真の友好親善とは何なのでしょう。それは言うまでもなく相互理解でしょう。そういう面で日本の小・中学校での韓国文化教育はこれからの両国民の友好親善のための兆しとなるものと確信できます。

韓国人から見る日本や日本人、逆に日本人から見る韓国や韓国人、お互い誤解される余地は山ほどあると思いますが、これからは両国民互いの文化に興味を持ち、なお、もっと積極的に互いの文化を知り、理解し、尊重するべきであると思います。

(カトリック大学校言語文化学部・助教授)